

# 沖縄県地方に伝承される台風俚諺の見直し\*

石 島 英\*\*

## 要 旨

沖縄県地方に伝承される台風に関することわざ90数片をとり上げてみた。一般論として人間社会におけることわざのもつ意義、台風俚諺の発生過程の推論、その特徴や問題点について考察した。また一般に台風俚諺のような自然にかかわる俚諺が現代受けをしない根拠について考え、現代人感覚でその価値を見直すにはどういう配慮が必要かについて提示した。

## 1. はじめに

ことわざ類（格言、金言、俚諺、比喩等）は人々の生活の規範になるものとして自然発生的に生まれるものと思う。誰が言いだしたかは問題にならない。それほどまでに大多数の人の生活の中に浸透したものである。

ことわざ類はどういう役割をもっているだろうか。社会科学辞典には「社会生活を円滑に営んでいくには大勢の人々の共同作業が肝要である。このためには共同作業のさまたげとなるようなものの行動を絶えず注意してそれを正しい軌道に乗せる」働きをすると説明している。

ことわざ類は社会の道徳、倫理にかかわる格言、金言等と自然現象にかかわる台風俚諺等に分けられる。道徳、倫理にかかわる、いわゆる通常のことわざが先述したような趣旨の人間の環境の規制を暗々裡に行っている。それに対し自然現象にかかわる俚諺は自然環境の監視とその急変悪化への対応を促進してきたように思われる。

このように自然に関する俚諺のもつ役割を見分けると、その叙述の形態もおおのずから定まってくる。道徳規範をうたう格言や金言等が人間同士の意表をつくために誇張、たとえ、逆説、重複等のレトリック上の技術をこらす。しかし、こういうことは自然に関する俚諺については全く不要である。人々が遭遇するであろう自然変化とそれから判断される内容を簡潔に表現することが重要

である。

沖縄地方の天気については加藤（1935）、山田（1975）が収録解説したものがある。また宮古、八重山地方のものについては、浦崎（1981）や瀬名波（1976）に一般のことわざ類とともに採録されている。さらに最近では市町村誌の史誌（那覇市史、佐敷村史、東風平村史、宜野湾市史、勝連村史、豊見城村史、具志頭村史等）の中にも天気俚諺が拾い上げられている。これらの資料を総合解析した結果、沖縄地方には400余の天気に関する伝承があることがわかった。

しかし、今日我々の社会においてはややもするとこれらの俚諺を祖先からのお荷物として受け取る人が多いように思う。本文はこういう趨勢をかえりみ、天気俚諺の中から台風（暑風雨）に関するもの90数片（附録）をとり上げてみた。そして、これらの台風俚諺の発生過程、その特徴、問題点について考えてみた。また俚諺が現代受けしない根拠、現代人感覚で、その価値を見直すにはどういう視点に立てばよいかについて提示した。

## 2. 発生過程についての推論

台風俚諺がどのような過程で発生したかについて考えてみたい。

第二次、第三次産業のなかった時代に生きた祖先の生活を思い浮かべよう。農耕や漁業が生活のすべてであった。それだけに自然の田畑や海は今日我々の住む家の庭同然であった。見たり、聞いたりするものの多くは蝶の行列であったり、ひばりのさえずりであった。そういう中に祖先は自然環境、動植物の生態について無意識のうち

\* Some notes on the typhoon weather proverbs in Okinawa Prefecture.

\*\* Suguru Ishijima, 琉球大学短期大学部。

——1986年11月20日 受領——

——1987年1月30日 受理——

状態であった。だから自然に異常事態が発生した場合にはその判断にとまどった。しかし、台風のごとき自然の急変は往々に不意打ちの危害をもたらしたので、祖先は無為に過すわけにはいかなかった。祖先はかような自然急変に遭遇した場合には「いったいこれは何だろうか」と問いかけたにちがいない。この素朴な問いかけの中にだんだんにその異常事態発生に対する経験が俚諺となって集約されたと考えられる。「海が米ぬかのように濁っているのは台風の知らせだろう」というぐあいに。

また一方ではこれも考えられる。台風や暴風雨のはじまりやその最中には異様なことを見聞した。海蛇が水面に浮上したり、トンボが群がり飛んだり、海鳥が陸に集まった。また強風に打たれて逃げまどう生物も見た。空や海の様相も大いに変わった。月暈日暈、大きなうねり、黒ずんだ積乱雲、雲に異様な動き異様な夕焼、海のにごり等すべて静穏な天気の日には見られないことだった。こういうときに山に海に遠出した人の多くは帰らなかった。命からがら帰った人の話は天と地の攪乱のすごさを印象づけるものだった。

こういう台風環境に接した経験を積み重ねるうちに祖先の頭には、台風といえは直ちにこれらの異常に攪乱された自然環境が浮んだ。すなわち台風を規定する諸事象に通じるようになった。

百件に近い諸々の事象と台風が結びつけられ台風俚諺となっている。このこと自体、台風という自然がそれを取りまくその他の自然環境と広く深く関連し合っていることを物語っているように思う。台風の属性は無限にあるだろう。おそらくそれらを列記することはできない。しかし、なかんずく俚諺におり込まれた事象は他の事象より台風とのかかわりが強いことを祖先は体得したにちがいない。この点に立ったときはじめて、今度は台風を規定するのではなく、逆に個々の事象から台風襲来を予告しようという姿勢に変わったと考えられる。すなわち、「台風時にはトンボが群がり飛ぶ」という台風規定形式をとらずに

「トンボが群がり飛べば台風がくる」という台風予知形式になったと推論される。

ところでかような過程ででき上がった台風予知形式の台風俚諺がもつ信ぴょう性はどうかであろうか。例えば「トンボが群がり飛べば」という条件文とそれから導かれる帰結文の「台風が来る」とから成り立っている俚諺を考えよう。これが自然界に正しく(真実に)成立することとはどういうことだろうか。条件とする内容が

正しく成立すること、そしてその上に帰結内容も正しく成立すること。すなわち、「トンボが群がり飛ぶ」ときにはいつもこれに引き続いて「台風が襲来している」ことである。しかし、誰もが認めるようにどの俚諺をとっても完べきにそうなるてはない。正しさの程度は俚諺によってまちまちである。また、俚諺が有効である空間的な広がりも個々によってことなるのも当然だろう。

### 3. 沖縄県内の台風俚諺とその特徴

沖縄地方に伝承される台風(台風のような強い風雨を含む)に関する俚諺は動物(26例)、植物(21例)、空や海(26例)、気象変化(22例)を手がかりとしたものに分類できる。県内でも地方により表現のあやが違うが内容は同じだと考えられるものについては代表的なものを1つあげた。手がかりとなっている事象が地域の方言で表現されている場合は内容の重複をはばからずとり上げてある。

動物では海蛇、トンボ、蜂、蜘蛛、蟻、かに、海鳥、鳥、つばめ、鷹、海亀、牛馬等が台風予知の手がかりとなっている。これらの動物の挙動を次のポイントから見ている。一つは台風によるはげしい攪乱の結果・平常の行動ができないために、④その苦しい環境からのがれようとする、⑤その環境の中に打開策を見出そうとする習性と関連づけていることである。

○海蛇が水面に多く浮遊しているときは台風の兆

○蟻が穴を出てひんばんに往復するのは大風の前兆

○かにかが波うちぎわから離れて陸地に巣をつくると台風

のような俚諺は④タイプ、

○蜂や蜘蛛が高く巣を作ればそのとき大風なく、低くつければ大風、

○海亀が白浜に産卵すればその年大風なく叢中なれば大風がある、

のごときは⑤タイプといえよう。

しかし、ある動物をとって、それが異常な行動を見せたら直ちに何かある(台風がくる)ことに結びつけたような俚諺は十分注意する必要がある。「海蛇が水面に多く浮遊しているときは台風の兆」という俚諺に対し、海蛇は爬虫類だから呼吸のために水面に浮き上ってくるのは当然だと反ばくする学生もいる。もっとも俚諺は「多く浮遊するとき」といっているように水面に出ている個体数が多いことが問題だが。しかし、かような生物科学的な知識の整理が大事なことはいうまでもない。

動物の動きが巨視的であるのは台風との関連をとらえる際には便利だったろう。しかしおもむろに成長する植物を台風と結びつけるのはいったいどうして可能だったろう。2, 3のおもしろい発想が秘められているように思う。第1の発想は植物の成長の良し悪しを見ることだ、たとえば

○でいごの花が例年になくきれいに咲くと大型の台風が来襲する。

○芋の花が多く咲くとき台風が多い。

○グンチ、ゲーン（すすき）の花が一斉に白くなるときは台風、または暑くなる。

第二の発想は風による攪乱にたえようとする習性を見ること、たとえば

○グンバイヒルガオが海の方へ蔓をのばせば大風。

○黍（きび）が地上高く根を下せば大風あり。

また第三の発想は台風の影響を生体内にとどめる習性を見ること、たとえば

○ナージチュー（ハイキビ・イネ科）の先の葉に節が入るとその数だけ台風がくる。特に第3の発想はおもしろい。ナージチュー（ナサチ、ナザギと発音する地域もある）の葉（葉柄のつけ根の部分）が台風の風にあおられたときシコリを残すためであろうか。頑丈な根を地中にはりめぐらす、繁殖力の旺盛なこのナージチューは農耕地に侵入群生する雑草で農民からいやがられた存在である。これにかかわる俚語は資料の出典によって多少表現の違いはあるが、葉の節と台風の襲来が結びつけられている。

これら台風俚語にとり上げられた動植物はすべて筆者が子供の頃までは身近かに散見することができた。しかし、この頃ではそう頻繁には見られなくなった。この不便さを埋めるために俚語にとり上げられた動植物についてのマメ知識を表1, 2に整理してある（この表を作成するにあたっては、主に日本生物教育会沖縄大会(1984)初島(1971)等を参考にした）。

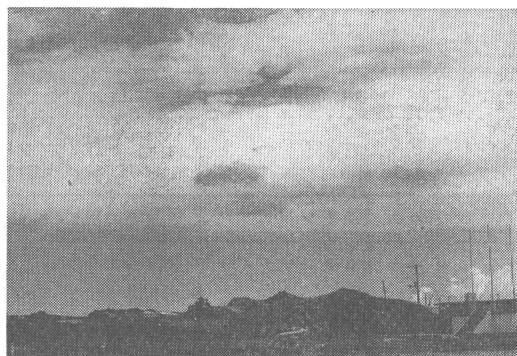
山田(1975)が中国起源の天気俚語としているものがある。たとえば

○空に点黒が現れると風雨が強くなる、

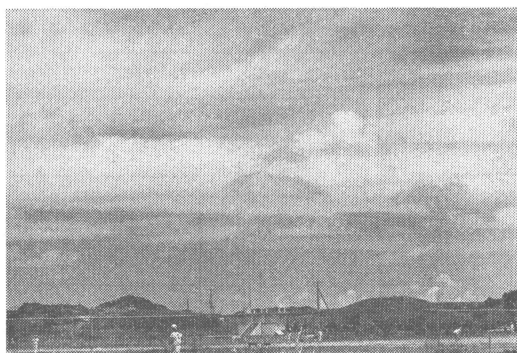
○西空に断虹が現れば台風接近、

○天色常ならず、鳥が高く飛び雲脚が黄色となり、太陽が赤色となると暴風となる、

等がそれである。しかし、中国起源とはいっても、沖縄の気候風土に通じた沖縄県出身の程順則の著書「指南広義」がその原典になっている。その著書の風信考によれば、



(a)



(b)



(c)

写真 沖縄本島南部の東風平中学校の運動場。気圧の谷接近に伴って生じたと思われる雲。1975年7月20日の午後、(a),(b)は15:00頃、(c)はその数10分後

ば、「西空に断虹あれば台風接近」は「天边有断虹亦颱風将至」とある。ただ厄介なことに「点黒」とか「断虹」の用語のもつ意義は明らかでない。

山田は「点黒」は前線や不安定線、または熱低や台風接近にともなって生ずる雲としている筆者は「点黒」ら

表 1

沖縄の台風俚諺にあらわれる動物相を理解するための資料

総 称	和 名	特 徴
ト ン ボ	ハラボソトンボ	九州から熱帯アジアにかけ分布。腹長約四センチ腹部は緑がかった黄褐色。黒色紋あり。腹部第四節以降が細い。成虫は3月～11月に見られる。
	ウスバキトンボ	強風時に風に乗って群飛することが多く2～12月に平地の沼か池に生息。
ハ チ	オキナワアシナガバチ	方言名でツブルバチャーと呼ばれ、屋敷林、灌木林に巣を作り攻撃的で人の頭をよく刺す。
	チビアシナ	ガバチススキやチガヤ原に巣を作る。琉球列島が北限で各地で普通にみられる。
ア リ	タイワンアメイロアリ	アメ色で部落内、畑地、草地、林地など各所にいる。
	アメイロハヤアリ	やや大型でやや脚が長くす早く走り廻る。甘物に早めに現れる。
ク モ	オキナワマンラグモ	沖縄諸島、石垣島の鍾乳洞内に住む。体長3ミリ、雄の触肢は体長の約2倍。
	オオジョロウグモ	奄美・琉球・台湾からインド・東南アジア・南方諸地域からオーストラリアにかけて分布。山野の樹間に大型の蹄型円網を張る。
タ カ	サシバ	シベリア東南部・北シナ・本州・四国・九州の各地に繁殖。冬に沖縄・シナ南部・インドシナ・マレー諸島・フィリピン・ニューギニア等に渡る。宮古島で越冬するものもいる。
	カンムリワシ	ヒマラヤ・インドシナ・沖縄・フィリピン・マレー・ボルネオ・ジャバ等に広く分布。頭部に羽冠が顕著なのでこの名がある。沖縄の八重山諸島に生息。
ツ バ メ	リウキュウツバメ	ツバメによく似ているが大きさの小さいこと尾の著しく短かいこと腹面が白くなく灰褐色を呈すること、下尾胴が灰黒色なこと等で区別できる。多くは留鳥。
	ミナミツバメ	琉球列島で繁殖する。習性はツバメに似ているが尾は短かく胸部腹部は褐色をしている。人家や橋げたの下に巣をつくる。
ウ ミ ガ メ	アオウミガミ	背面は青みを帯びた灰褐色か暗褐色。慶良間列島の内海や宮古、八重山諸島に6月ごろ産卵のため上陸する。草食性。
	アカウミガメ	背面は灰褐色か黒っぽい暗赤褐色。全世界の熱帯と亜熱帯の海域に広く分布。繁殖期は6～7月頃。雑食性。
ウ ミ ヘ ビ	エラブウミヘビ	本州の南岸からアジア大陸の東岸沿いに南へインドネシア付近まで分布。卵生。初夏から秋にかけて岩礁地帯に上陸し産卵。
	イイジマウミヘビ	琉球列島と台湾との近海に分布。
カ ニ	ツノメガニ	成熟個体では、角膜の先に棒状の角が発達して眼柄とはほぼ等長の赤褐色角ができる。奄美大島以南インド、西太平洋に分布。
	オキナワ ハクセンシオマネキ	本土産のハクセンシオマネキによく似ているが生態発生から明らかな相違がある。沖縄島・八重山列島・フィリピン・東インド諸島その他。
	ヒメシオマネキ	一定の穴孔をもたないで、放浪性あり。マングローブ沼沢地に多く生息。石垣島・台湾・フィリピン・マレー・パラオ諸島沿岸。

表 1 (つづき)

総 称	和 名	特 徴
ウ ミ ド リ	カツオドリ	大きな嘴をもつ熱帯性海洋鳥。東西半球の熱帯水域に生息するが、わが国に見るものはその亜種。
	オオミズナキドリ	ミズナキドリの中で最も普通の種類で形の大きいことと、全身に白と褐色の斑紋のあることで他種と識別できる。冬には南シナ・フィリピン・ボルネオ・ニューギニア・オーストラリアまで渡る。
	クロアジサン	尾が凸型で他のアジサン類とは全く異なる。本種は大西洋・インド洋および太平洋のおもに熱帯海域に分布する。
	セグロアジサン	小笠原島・南鳥島・沖縄列島・台湾にその繁殖地があつて本州・伊豆七島・四国・九州等に台風のとぎ渡来することがある。

表 2

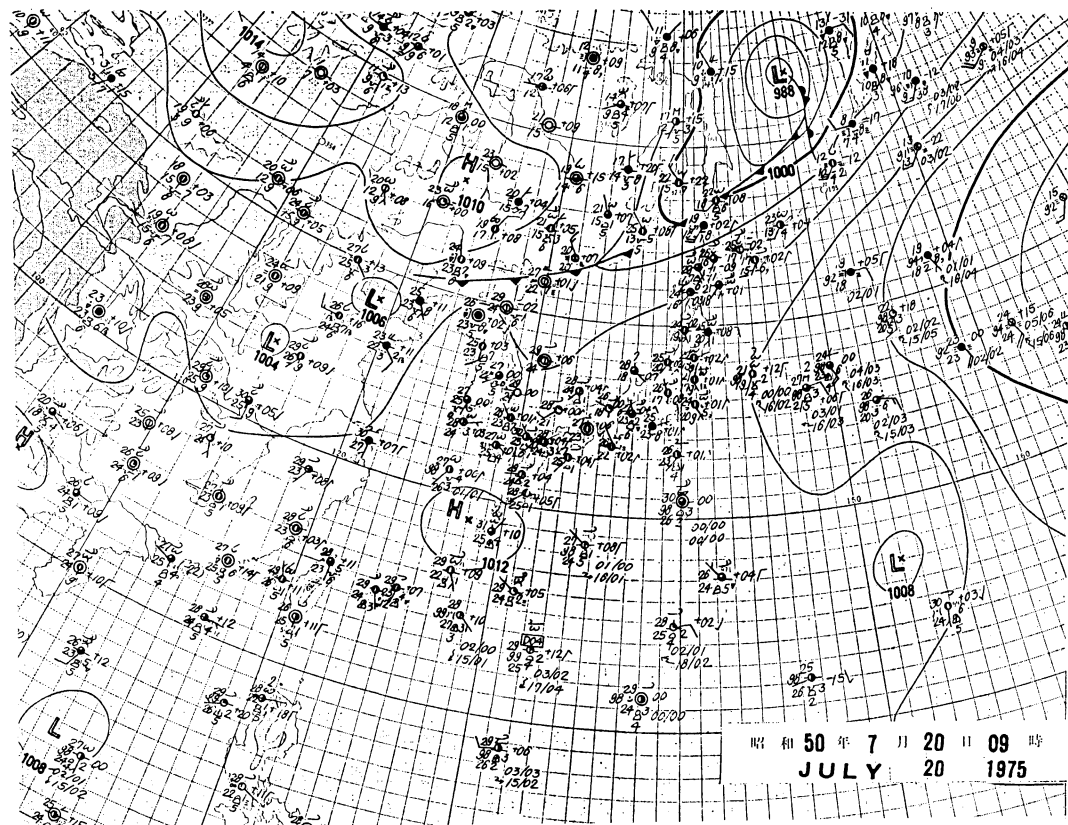
沖縄の台風俚語にあらわれる植物相を理解するための資料

総 称	方 言 名	特 徴	備 考
デイゴ	ディーグ (首里・石川)	落葉高木 沖縄県の県花 御路樹・広園樹・漆器材料に利用	梯姑 マメ科 インド原産
ピロウ	クバ (沖縄広域)	琉球列島・台湾および南中国などの暖地に自生する。 葉はクバ扇、クバ笠などの民芸品に利用されている。	ヤシ科
ハマゴウ	ハマホーギー ホガーギー	海岸の砂地に多へ見られる匍伏 (ほふく) 性の低木。 多年生、白色または紫色の花	クマツヅラ科
グンバイ ヒルガオ	アミフィバナ (沖縄広域)	南九州以南の琉球諸島・熱帯各地に見られる。 匍伏性、多年生、紅紫色の花	ヒルガオ科
ゲッキツ	ギチチ ギキチ ギキチャー	石灰岩質に多くみられる。 人家の生垣として栽培。 印鑑などを作る木、白色で芳香がある。	ミカン科
ハイキビ	ナージチュー (沖縄本島) ナージチュー (首里) ナザキ (八重山)	海岸近くの湿気のある所から山裾の原野まで、いたるところに生え、枝は細く散生し、地中に長い根茎をもつ。多年生。	イネ科
キビ	マージン	一年生、または多年生、円錐花。	イネ科

しき雲を撮影 (写真 a, b, c) を撮影したことがある。その日は午前中はよく晴れていた。正午頃から雲が出はじめた。午後 3 時頃、撮影場所 (沖縄本島南部東風平中学校運動場) の北東付近に黒ぼい塊状の雲が 2, 3 発生 (写真 a, b), 数十分後にはその数は増え (写真 c) また規模も大きくなった。夕方 5 時頃には那覇、本島南部付近に局所的ではあるが雨が降った。写真中の雲はおそ

らく弱い気圧の谷接近 (天気図 (第 1 図) 参照) に伴い発生した雲であるが、かような雲を点黒といっているように筆者は思う。“断虹”についても山田は“日没時西空の水平線近くで暈の一部が濃厚黄赤色となる現象”と解説を加えているが、その真偽についてはさだかでない。断虹は虹なのか暈なのか?

全国どこの地方でも朝焼、夕焼が風雨予知に使用され



第1図 日本気象庁作成の昭和50年7月20日9時の地上天気図

ているのは周知のとおりである。ただ本土各地では殆ど画一的に“朝焼は雨”，“夕焼は晴”となっている（大後，1984）のに対し，沖縄地方ではまちまちである。沖縄本島の俚語では，朝焼は雨か風，宮古・八重山地方では雨を予知している。しかし，夕焼については，沖縄本島と八重山地方では風が，宮古地方では晴が対応している。もっとも沖縄本島でも「秋の夕焼は翌日晴天」のごとく本土と同じく夕焼は晴としているものもある。したがって，こういう例外を認めた上で結論的には，沖縄では“朝焼は雨”，“夕焼は風”とする俚語が多いといえよう。

○日暮れ雲焼明日の嵐，夕日のために雲が赤く見える日の翌日は風が出る，

○ユースンリアケー（夕焼）は台風，

等がその例である。沖縄地方は台風シーズンの頃は天気東から変わることを反映した俚語考とえられる。

海の様相変化を手がかりとした台風俚語も多い。山田が糸満漁夫起源としている俚語がそれである。海をわが家の庭のごとく潜った糸満漁師の生活体験の中から生ま

れた俚語である。その特徴はヌーリー雲やムサ（うねり）等を指標に台風接近の様相を記述していること（石島（1984））。台風接近の手がかりとなるものをかなりつつ込んで説明しているので俚語というより解説というのがふさわしい。その点，一般人には“ことわざ”として記憶されにくいという欠点もあろう。

○ヌーリー雲と地上風と海上の波浪がそれぞれ方向を異にするとき天気悪化し，暴風となる。

○太平洋側でムサが南からくるときは台風が接近することが多い。

ヌーリー雲という雲の形態について糸満漁師にきき取り調査をしたことがあるが，上層の雲という莫然とした規定しか得られなかった。天気俚語に通じていた先代の人々によって無線やラジオの気象通報に依存したタイプの若層の漁師が増えた。こうして天気俚語が忘れられつつある今日やむをえないことである。ヌーリーは沖縄方言で糊のこととか，虹のことを意味するので糊状雲とか虹状雲とこじつける人もいる。ヌーリー雲が本来どの

ような形態の雲に冠せられたものかきだかでない以上、ヌーリーの意味をとやかく詮索する価値がないように思う。

また海鳴りのきこえてくる方向から台風接近を知らせる俚諺がある、この種の伝えはどこの地方にもある例だが、たとえば

- 寅方の海鳴りは台風
- 中城屋宜の海が鳴ると台風
- 伊計崎鳴れば暴風

等がある。以上、90数例の台風に関する俚諺の特徴を見てきた。多量の台風俚諺があること自体、我々の祖先がいかに細心の注意を払って台風を監視し、その接近の手がかりとなるものを抽出するのに苦心したかを物語っているように思われる。

#### 4. 現代人の俚諺を見る眼

我々現代人は前述した俚諺の価値をどこに発見すればよいか。科学技術がこれほどまでに発達した現代社会に天気俚諺の入り込む幕は全くないというのが多くの現代人の心境だろう。しかし、皮肉なことに「有明海の天気のことわざ」(1986)によれば1985年台風13号は現代科学のネットワークの隙を通りぬけて有明海を急襲している。それにより出漁中の漁船が多数転覆し、多くの犠牲者を出した。そのときの当事者の反省はもう少し、身近かに起こりつつある気象の変化に注意を配っておればよかったということだった。あのときは、有明海付近に伝わる天気俚諺が生かされたといっている。有明海難防止対策推進連絡会会長の言をかりれば、8月30日夜、「有明海の穏やかな海上には北東風がサーと吹いて、生暖かく、月は真白に見え、虹がでていました」ということである。その翌朝、台風は有明海を襲っている。この天気急変の状況は

- 夏は北東風やすぐ雨になる(福岡県)
- 暖風が来ると強風来る(長崎県)
- しろじゃうじ(月夜にあらわれる虹)が立つと天候がすぐ悪くなり時化する(佐賀県)

等のことわざにしみじみも語られているように思う。

道徳や倫理を語る金言や格言ではないのだから、やはり我々現代人は天気ことわざの価値をその科学的信ぴょう性に求めなければならない。しかし、このことについてまじめに考察や検討を加えた人、また加えようとする人は少ないように思う。昔の人は天気に関することわざをすんなり受け入れた。ところが現代人は「あんな馬鹿な

こと」と抵抗を示す傾向がある。それは単に科学技術文明のおかげで天気俚諺による知恵が不必要になったからだろうか。俚諺を見直す際にはこの理由をじっくり考えておく必要があると思う。

現代人は俚諺のどこに抵抗を示しているのか。筆者は次のように考える。現代人は、例えば、「トンボが群がり飛べば台風が来る」という俚諺は「台風ならトンボが群がり飛ぶ」というべきことの誇張した表現(逆の表現)であることに不信感を抱いている。「台風→トンボ」も、またその逆の表現の「トンボ→台風」も両方とも正しいこともある。しかし、それは両者の真実性が別々に科学的に検証された後にはじめてわかることである。現代人は「台風→トンボ」の真実性については第二節の発生過程で見たように疑いをはさまない。即ち祖先の生活体験を通して十分実証されていると認めている。しかし、「トンボ→台風」の真実性については別だと。これについてはあらたに科学的な考察による検証が必要なことを知っている。ところがそれに対してはその道の研究者たちの科学的な考察や検討が少ない。ここに現代を生きる一般社会人が俚諺を見はなしていく根拠があるように思う。

こういう視点からみると今我々現代人がなすべきことは個々の諺俚の信ぴょう性について科学的なアセスをすることだと思う。そして信ぴょう性の高い俚諺は残し、低いものはすてることが肝要だ。

実際、上層雲や海水の状態から台風を予知する俚諺については気象学的な因果関係を追究できる。また動植物を手がかりとする俚諺についても「なまずによる地震予知」の可能性を追究のごとく科学的な調査研究を行うことによりその信ぴょう性を明らかにすることができよう。かようにして将来、俚諺は当る確率を付して提示することができるようになれば現代人の俚諺に対する親しみも大いに得られることになろう。そうなれば、祖先からのお荷物として冷やかな眼を当てられてきた俚諺も、現代社会になお機能するものとして生きかえてくるものと思う。

#### 謝辞

集録された俚諺とかかわりのある沖縄の生物相のガイド(付表)を作成するにあたって、琉球大学農学部東清二教授、理学部島袋敏一教授、諸喜田茂充助教授、理学部海洋学科学学生の比嘉貴一、志多伯純諸氏の御助言御協力をえましたことに対し厚く感謝の意を表します。

## 文 献

加藤茂数, 1935: 琉球気象考, 天気と気候 2, 274-278.

——, 1984: 琉球気象考 [二], 天候と気候 2, 327-332.

——, 1935: 琉球気象考 [三], 天候と気候 2, 470-475.

——, 1935: 琉球気象考 [四], 天候と気候 2, 522-526.

山田 一, 1975: 沖縄地方の天気俚諺<解説>暴風第3号, 沖縄県気象災害防止協議会.

浦崎安常, 1981: 宮古の俚諺, 格言, 宮古俚諺格言研究会報,

瀬名波長宣, 1976: 八重山のことわざ, 沖縄春秋社版.

大後美保, 1984: 天気予知ことわざ辞典, 東京堂出版.

石島 英, 1984: 台風との闘い, 「琉球の風水土」築地書館.

有明海海難防止対策推進連絡会, 1986: 有明海の天気のことわざ, 福山印刷.

日本生物教育会沖縄大会, 1984: 沖縄の生物, 南風原印刷,

初島住彦, 1971: 琉球植物誌, 沖縄生物教育研究会発行.

## (附録)

沖縄県に伝承されている台風に関する俚諺の集録

(注) カタカナは方言, 俚諺末尾の( )内の O, M, Y はそれぞれ沖縄, 宮古, 八重山地方の俚諺であることを示す

<動物を手がかりとするもの>

- ① 海蛇が水面に多く浮遊しているときは, 台風接近の兆. (O)
- ② 赤とんぼが飛んだら, 台風がやってくる. (O. M.)
- ③ カジフチダーマー (とんぼの一種) が群らがつて飛ぶと, 台風がくる. (O)
- ④ ミーターマ (とんぼの一種) が地ノカイ降りリティチーネ風, アーケージュ (とんぼの一種) が飛ビネ台風. (O)
- ⑤ 蜂や蜘蛛が高く巣を作ればそのとき大風なく, 低く作れば大風. (O, Y)
- ⑥ スカバチャー・チブルバチャー (蜂の一種) が巣を低い所につくと台風が多く, 高い所につくと台風は少ない. (O)
- ⑦ 蜂の巣風当り悪き処に作る時は暴風多し. (O)

- ⑧ 蜘蛛が巣を横に張ると台風のある年. (O)
- ⑨ 蜘蛛が巣を片隅に張ると台風. (O)
- ⑩ 蜘蛛が巣をたてに張るときは雨, 巣をたたむときは大風. (O)
- ⑪ 蟻が穴を出てひんばんに往復するのは大風の前兆. (O)
- ⑫ 蟻が住宅内に這入るときは風雨の前兆. (O)
- ⑬ かにが波うちぎわから離れて陸地に巣を作ると台風. (O)
- ⑭ 海鳥が多く騒ぐのは大風の兆. (O)
- ⑮ 海鳥が東から西に陸地を渡るときは台風がくる. (O)
- ⑯ 海鳥が陸に上がるときは暴風. (O)
- ⑰ 鳥が下枝に巣をかける年は暴風がある. (O)
- ⑱ 鳥が低く巣を作るときは風. (O)
- ⑲ つばめが群集すれば, 台風の兆. (O. Y)
- ⑳ つばめが低く飛ぶと台風がくる. (O)
- ㉑ マダヤー (つばめ) が飛ビネ雨風. (O)
- ㉒ つばめが多く飛び交うときは風. (O)
- ㉓ 鷹渡りは暴風の前兆. (O)
- ㉔ 海亀が白浜に産卵すれば其年大風なく, 叢中くみちらなれば大風がある. (Y)
- ㉕ 牧場の牛馬が林のそばに群集すればその反対方向で風雨が強くなる. (Y)
- ㉖ イチムシ (獣類) がわめき騒ぐときは天災地変大風の前兆. (O)  
<植物を手がかりとするもの>
- ㉗ でいごの花が例年になくきれいに咲くと, 大型の台風が襲来する. (O)
- ㉘ でいごの木繁り深ければその年大風. (O. Y)
- ㉙ いつもよりでいごの花が多いときは, 台風が多く発生する. (O)
- ㉚ くばの木一時に二枚以上新芽を出せば大風. (Y)
- ㉛ 蒲葵が一時に二本以上新芽を出せば其年大風あり. (Y)
- ㉜ 甘藷 (さつまいも) のつるが上方へ向かって伸びれば大風. (Y)
- ㉝ 芋の花が多く咲くとき台風が多い. (O)
- ㉞ 田芋の葉の豊繁過ぐれば, 暴風の前兆. (O)
- ㉟ ハマホーギのつるが陸地に向かうときは台風. (O)
- ㊱ 軍配ヒルガオ, 海の方へ蔓をのばせば大風なく, 陸の方へのばせば大風あり. (Y)
- ㊲ 甘蔗 (さとうきび) が急に伸びる年は暴風の前兆.



(O)

- ㉔ 甘蔗や<sup>たけのこ</sup>筍が急に伸びるときは暴風の前兆。(O)
- ㉕ 海の藻草が海面に浮かび上がるときは、大風になる前兆。(O)
- ㉖ 海の雑草混ひ泡波あるときは暴風の前兆。(O)
- ㉗ グシチ、ゲーン(すすき)の花が一斉に白くなるときは台風、または暑くなる。(O)
- ㉘ 桑の芽立ち早ければ次の台風が近い。(Y)
- ㉙ ゲッケツが時節なく花咲くのは暴風の兆。(O)
- ㉚ ギキチ(㉔と同じ植物)の花の節無しに咲くときは風。(O)
- ㉛ ナージチューの先の葉に節が入ると、その数だけ台風がくる。(O)
- ㉜ ナザチ(㉔と同じ植物)の葉の節多き時は暴風起る。(O)
- ㉝ 黍の地上高く根を下せば大風あり。(Y)

<空を手がかりとするもの>

- ㉞ 空に点黒が現れると風雨が強くなる。(O)
- ㉟ 西空に断虹が現れば台風接近。(O)
- ㊱ 雲脚が黄色となり、星の動揺が目立ち、日月の暈が太く白色を呈し、空が赤く焼けたとき暴風となる。(O)
- ㊲ ユーサンリアケー(夕焼)は台風。(O)
- ㊳ 朝焼けは晴、夕焼けは台風の前兆。(O)
- ㊴ 日暮れ雲焼け明日の嵐、夕日のために雲が赤く見える日の翌日は風が出る。(O)
- ㊵ 天色常ならず、鳥が高く飛び破れ、雲脚が黄色となり、太陽が赤色となるとき、暴風となる。(O)
- ㊶ 日暈ができると台風。(O)
- ㊷ 日月暈の破目の方向より大風。(O・Y)
- ㊸ 暮れ方、明るい時は暴風の前兆。(O)
- ㊹ スクナ(佐敷村須久名森付近の地名)の方面あたりが明るくなると風が吹く(嵐になる)。(O)
- ㊺ ティーラ(太陽)のヒジ(ひげ)は台風の前兆ではない。(O)

<海を手がかりとするもの>

- ㊻ 海水がにわかに変化し、水面が米糠のようによごれたときは台風接近の兆。(O)
- ㊼ 海のウネリによって内波がおこり、砂浜に波状の砂型ができるのは台風の前兆。(O)
- ㊽ うねりが南からきて、風向が東または南から北東に

変わると台風が近い。(O)

- ㊾ 太平洋側でムサ(うねり)が南からくるときは、台風が接近することが多い。(O)
- ㊿ うねりが東からくるときは台風は東に行き、西からくるときは西に行く。(O)
- ㊽ 糸満の沖20マイルぐらいの海上で、南西のうねりがなくなり南東のうねりがくると、台風は近い。(O)
- ㊿ 海鳴りの方向で台風の有無がわかる。(O)
- ㊽ ヌーリ雲と地上風と海上の波浪がそれぞれ方向を異にするととき天気悪化し、暴風となる。(O)
- ㊽ 寅方の海鳴りは台風。(M・Y)
- ㊽ 東の海の高鳴りは暴風の兆。(O)
- ㊽ 中城屋宜の海が鳴ると台風。(O)
- ㊽ テンナ崎鳴れば暴風。(O)
- ㊽ 伊計崎鳴れば暴風。(O)
- ㊽ 寅の方礁鳴ると風雨強くなる。(M・Y)

<気象を手がかりとするもの>

- ㊽ 春の南風、夏は北風吹けば暴風雨あり。必ず雨を伴う。(O)
- ㊽ 風が北寄りになると大風。(Y)
- ㊽ 四、五月頃豪雨が多ければその年大風なし。(Y)
- ㊽ 夏至の季節風卓越すればその年大風なし。
- ㊽ 夏至のとき、雷雨頻りに降ればその年大風なし。(Y)
- ㊽ 北東ないし、南東の風がムルシ(塊状の風の息がる)になってくると台風。(O)
- ㊽ 小満芒種に雨が多いと台風が少ない。(O)
- ㊽ 小満芒種に雨が少ないと台風が多い。(O)
- ㊽ 戻い風と雨は台風の前知らせ。(O)
- ㊽ 風の左廻りは暴風の兆。(O)
- ㊽ 小旋風が起こり、塵や木の葉まきあげれば台風の兆。(Y)
- ㊽ 夏、南より東に風の廻るときは暴風の前兆。(O)
- ㊽ 台風の空模様になり、にわか雨となり、風の太息あれば台風は猛烈になる。(Y)
- ㊽ ヌーリが西からくるときは、二、三日うちに雨、南からくるときはバンバン(風が強くなる)、北からくるときは天気は良い。(O)
- ㊽ ヌーリが北東ないし、南東から速く動いてくるときは暴風雨が近い。ウチヌーリが北よりの方向に流れるときは暴風雨が近い。(O)
- ㊽ ヌーリが北東から東、南と廻って速く動くとき、台

- 風は西にそれる（この場合ヌーリは、地上風よりも前に変化する）。（O）
- ⑩ ヌーリ雲、棒のごとく見ゆるは暴風の前兆。（O）
- ⑪ 上層雲と下層雲が共に走る時は暴風の前知らせ。（O）
- ⑫ ガサムネ雲（巻雲）の現るは大風の兆。（Y）
- ⑬ カジナ（風の根、すなわち風の吹いてくる方向の地平線から天頂の方へのびる光のすじ）が現れると、台風が発生しており、三、四日後に接近することがある。（O）
- ⑭ ガチャネーが現れば暴風。（O）
- ⑮ 巻雲、巻層雲が現れるのは大風の兆。（Y）

## “Tropical Micro-Meteorology and Air Pollution”に関する 国際研究集会（International Conference）のお知らせ

上記の国際集会在下記のとおり開催されます。

開催日 1988年2月15～19日

開催地 New Delhi, India

集会の目的は、開発途上国において開発に伴う各種の災害、被害が発生しているため、特に大気汚染を中心として今後の災害、被害の発生を防止する手段、およびすでに災害が明らか地域においてその被害を軽減する手段を勧告するための知識につき討議することになってい

### 議 題

- (1) 人工過密地における事故による多量の有毒物放出の対策
- (2) バイオマス燃焼による煙、塵、および風による土砂の舞い上がりを含む都市、非都市域における小さな分散した源と巨大工業源の組み合わせた汚染のモデル化およびモニタリング
- (3) 将来予想される代替エネルギーの利用増大および燃焼効率の改善が熱帯域の大気汚染に及ぼす効果

(4) 陸地および海洋上の熱帯境界層の特性

(a) 境界層の力学

(b) 観測

発表希望者は1987年8月15日までに200～400字の要旨を下記宛に御送付下さい。

Professor M.P. Singh,

Head, Centre for Atmospheric Sciences,

Indian Institute of Technology,

Hauz, Khas, New Delhi-110016, India

国際プログラム委員会では要旨に基づき口頭、ポスターいずれかの発表を決定します。口頭発表者には更に要旨集のための2ページの用紙を送付し、1987年12月15日までに原稿とともに New Delhi に送ることになっています。

なお原稿は審査後 Atmospheric Environment に掲載されることになっています。

詳細は国立公害研究所大喜多敏一までお問い合わせ下さい。



## 極東域のモンスーンに関する研究会

1986年、日中二カ国による第1回の“極東域のモンスーンに関する研究集会”が東大海洋研で開かれたが、第2回目の会議が、中国四川省成都でこの3月30日～4月

4日にわたって開かれる。日本側の参加者は、浅井・住（東大）、吉野（筑波）、岩嶋（京大）、加藤（名大）、村上・新田（気研）の7名である。